

岩

船

シテ 渡邊 茂人

ワキ 平木 豊男

ワキツレ 北島 公之

問 山田 讓二

(能)

大鼓 田中 一義
小鼓 多田 順子
太鼓 大橋 紀美
笛 矢郷由香子

後見 島村 明宏
田屋 邦夫

地謡

米島 和秋 佐野 玄宜
笠間 啓 藪 俊彦
中村 清 高橋 憲正
大澤 永靖 川島 英治

休憩 二十分

紅葉狩

(連吟)

山本 貢伸
長野 裕
岩井 嘉樹
浅谷 之信

(狂言)

不見不聞

太郎冠者 能村 祐丞

有徳人 炭 哲男
座頭 荒井 亮吉
後見 中尾 史生

(能)

通小町

シテ 渡邊 荀之助

ワキ 苗加 登久治

大鼓 飯嶋 六之佐
小鼓 住駒 幸英

笛 片岡 憲太郎

後見 松田 若子
福岡 聡子

地謡

高野 秀幸 高橋 右任
谷 清士 佐野 由於
山崎 健 広島 克栄
松本 博 佐野 弘宜

能 岩 船 (いわふね)

平和と繁栄を謳歌する御代に、賢王の命を受け住吉の浦へ急ぐ臣下たち（ワキ・ワキツレ）がいました。浜の市を立て、高麗・唐土の宝を買い取るのが任務です。宝の市には大勢の人が集まりました。銀盤に玉を据え持つ唐人風の少年（前シテ）もいて、臣下が声を掛けると、大君の徳治を讃歎し、竜女の如意宝珠を捧げたいと言います。いにしえ神と君が行き会い、今宵松風の爽やかな住吉の浦の風光と賑わいを賞美して、少年は天の探女を名乗り、宝を積んだ岩船を漕ぎ寄せるため、月空へ舞い昇ります（中入）。やがて竜神（後シテ）が現れ、宝を満載した岩船を守護し、拍子を取って岸に引き寄せます。金銀珠寶は山のごとく、永遠の繁栄が約束されたのでした。この明快な祝言性が喜ばれて、本曲は半能で上演されたり、早くから単純化されてきましたが、原作は前シテが老人（竜神）、天の探女がツレで出る構成と推定され、室町幕府の対明貿易を背景とするようです。

狂 言 不 見 不 聞 (みずきかず)

耳の遠い太郎冠者一人では心もとないと、目の不自由な座頭の菊市を相留守に頼んで主人は外出します。盗人が入る音を聞いたら、菊市が冠者の膝を突くことに決め、暇をもて余した菊市が音もせぬのに合図をして冠者をなぶり、怒った冠者が小舞を舞い、終わった合図に肩を撫でるから褒めよと言ひ、足で肩を撫でて、気づいた菊市を怒らせ、菊市はまた平家語りをすると行って冠者の悪口を語り、はては互いに足を取り、こかし合ひです。

能 通 小 町 (かよいこまち)

八瀬の山里に夏安居する僧（ワキ）の庵を、毎日木の実と爪木を持って訪れる女（ツレ）がいます。市原野に住むという女は僧の求めに応じて持参した木の実の名を数え上げ、名乗りを促されると「小野とはいはじ薄生ひたる…」という言葉を残して消え失せます。それが小野小町の歌の一部であることを思い出した僧は、吊いのために市原野へ出掛けます。そこへ吊いを喜ぶ小町の亡霊と、跡を追って深草の四位の少将（シテ）が現れます。生前少将が小町のもとに百夜通い詰めた物語は僧も知っていて、懺悔による罪滅ぼしを二人に勧めます。小町から少将へ百夜通え、姿を変えよと不誠実な注文が相次ぎましたが、少将はそれが虚言であるとは知らず、百夜目も祝言の酒杯を思い描きながら仏戒を保とうとした生真面目な少年です。虚言と知り憤死したはずですがそれには触れず、百夜通いを二人して再現したことで、実は小町も僧のもとに通い詰めたことで、共に成仏できました。